子らに理想の灯を

車で某市某小学校の門前を通り過ぎる時、ちらっと「オアシス運動」の看板を見た。オは「おはよう」、アは「ありがとう」、シは「しつれい」だったかな、スまでは読めなかったが、語路合わせで必然的に「すみません」となるだろう。

おはよう、ありがとうの二つまでは大事な教育だ。あとの二つは子供のころからしつける必要はない。それぞれの人生過程で自然に身につけていけばよい。日本の総理クラスには強請しても守らすべき項目ではあるが。かりに、このオアシス教育を徹底したとすれば、子供たちは学校では頭の下げっ放しだ。

教育には、文化を子らに伝達する面と、文化創造の能力を育(はぐく)む面の両作用があり、オアシス教育では後者の面がなくなる。「すみません」教育の連発ではさぞかし教師は楽だろう。そのことは当然、子らの活力と創造力はのばされず、心に太陽は輝くこともない。孔子は教育について、「学んで思わざれば暗く、思うて学ばざればまどう」と言っている。他から学び、自分で考える。この両面があってこそ教育といえる

のだと。自分で考える＝自立する志、そこにのみ創造があり、理想が輝く。

オアシス教育では管理社会ぴったりの人間しか出てこない。親たちも支配者も安心する。しかし、その人間自身も、社会も国家も枯渇の道をたどっているのである。

若き日は、「すみません」でなく、昂然空を仰ぐ頭にしか理想は宿らない。今こそ、子らに理想を！

「人類の教師」孔子、釈迦、ソクラテス、キリスト四聖に共通する比類なき特性は、現状打破に命を賭けたことである。碩学は、「彼ら皆、彼らに先行する思想や信仰を覆すものとして現れた」（和辻哲郎）と。老齢化社会で真に憂うべきは、理想なき若者、老化した若者たちの出現である。

（一九八九年三月十一日）